

【68年5月／キリスト教】

「時のしるし」としての68年5月

伊藤潤一郎

(早稲田大学／日本学術振興会)

「キリストは唯一の革命家だ」(68年5月の壁の言葉)

はじめに

68年5月とキリスト教——この一見矛盾する組み合わせは、私たちにいかなることを教えるだろうか。68年5月が大学や国家権力などあらゆる既存の制度への異議申し立てであった以上、当然その批判対象に教会が含まれないはずがない。ローラン・ジョフランが述べるように、68年当時の人々が、「教会とドゴール主義の教条的で権威的な二つの遺産にがんじがらめにされた社会にうんざりしていた」¹のだとすれば、68年5月の出来事とキリスト教は完全な敵対関係にあることになるだろう。しかし、すべてのキリスト教徒が教会制度を保守することに汲々となっていたということも考え難い。というのも、20世紀のフランスにはキリスト教左派——キリスト教を信仰するがゆえに政治において左派の陣営に属する人々——という大きな潮流が存在しているからである。そうであれば、68年5月とキリスト教は、単純な対立図式によっては捉えられない複雑な様相を呈する組み合わせだということになるだろう。フランス革命と1905年の政教分離法を経てもなお、キリスト教はフランス社会に大きな影響力をもっており、それゆえに私たちはキリスト教を68年5月の敵対者と思いなしてしまいがちである。だが、エピグラフに引いた壁の言葉一つ

¹ Laurent Joffrin, *Mai 68 : Une histoire du mouvement*, Seuil, « Points », 2008, p. 13. ローラン・ジョフラン『68年5月』コリン・コバヤシ訳、インスクリプト、2015年、12頁。

をもってしても、5月の出来事にキリスト教徒が不在ではなかったことがわかるだろう。しかし他方で、68年5月においてキリスト教徒が周縁的な存在であったこともたしかである。たとえば、5月の日々を現場で体験した西川長夫の『パリ五月革命私論』では、キリスト教徒の存在は見え隠れするものの周縁的な位置にとどまっている²。しかし、キリスト教のこのような周縁性こそ、むしろ68年5月の出来事を多面的に理解する鍵となるのではないだろうか。68年5月の運動に積極的に関わっていったキリスト教徒の姿を追うことで、「3月22日運動」をはじめとする68年5月のメインストリームを中心に記述することからは見えてこない5月の出来事的一面を明らかにすることができるのではないだろうか。キリスト教を単純に批判対象と見なすのではなく、5月の日々を担ったキリスト教徒に視線を向けることは、68年5月の出来事性をより深く理解することへとつながりうるのである。

したがって68年5月とキリスト教をめぐる議論は、当時のキリスト教徒の具体的な動きを記述すると同時に、そのようなキリスト教徒の動向を支えた思想的背景を明らかにする必要がある。それでは、現在までのところこのような作業はどの程度なされているのだろうか。日本語で読めるものに限れば、「カトリック総合文化誌」を謳う『世紀』の1968年8月号が、毎号掲載される「世界の動き」の欄に「五月革命とカトリック者」³という無記名記事を載せ、いち早く5月の出来事におけるカトリックの動向を紹介しているが、管見の及ぶ限りでは、68年5月とキリスト教の関係性を扱った記事や論文はこれ以外には見当たらない。これに対しフランス語圏においては、68年の時点でいくつかの証言が出版されているほか⁴、近年では学術研究の対象として68年5月とキリスト教の関係が注目を集めるようになっている。

² 西川の著作では、5月27日のシャルレッティ・スタジアムでの集会に牧師のグループが参加していたことや、本稿のエピグラフの壁の言葉（西川自身が撮影したソルボンヌの中庭の写真に写っている）が紹介されているが、キリスト教徒の詳しい動向は論じられていない。西川長夫『[決定版]パリ五月革命私論』、平凡社ライブラリー、2018年、166、207頁参照。

³ 「五月革命とカトリック者」、『世紀』第219号、1968年、60-62頁。これは*Informations catholiques internationales*誌の1968年6月号の一部を訳出したものである。

⁴ 代表的なものとして次の二つがある。Robert Davezies, *Mai 68. La rue dans l'Église*, Éditions de l'Épi, 1968. Robert Serrou, *Dieu n'est pas conservateur*, Robert Laffont, 1968.

グレゴリ・バローの『カトリックの68年5月』（1998年）を嚆矢として、エティエンヌ・フィユの『アルジェリア戦争と1968年5月のあいだのフランスのキリスト教徒』（2008年）やドゥニ・ベルティエの一連の論考によって、歴史学の観点からの学術研究が大いに推し進められている。本稿もこれらフランス語圏の研究成果に依拠しつつ、68年5月とキリスト教の関係に迫っていくが、その際に私たちはキリスト教徒のなかでもフランスにおける多数派であるカトリックに焦点をあてることにする。後に見るように、68年5月においてはカトリックとプロテスタントが共同で声明を発表するという事態も起きることとなるが、紙幅の限られたなかで68年5月とキリスト教の関係について一つの視座を提示するためには、カトリックに議論を限定せざるをえない。では、その視座とは何か。それは、68年5月のカトリックの動きの底流にあるのが、第二バチカン公会議で示された思想であるというものだ。それゆえ以下では、まず第二バチカン公会議について最低限の事柄を確認したうえで、可能な限り当時の声明文やビラの文言を引用しつつ、68年5月におけるキリスト教徒の動向と思想に迫っていく。

68年5月のコンテクスト——第二バチカン公会議

68年5月におけるカトリックの動向を捉えるには、5月の出来事の渦中における動きだけを抽出して考察するのではなく、より広く60年代のカトリック教会をめぐる状況を視野に入れる必要がある。60年代のカトリック教会にとって最大の出来事は、言うまでもなく第二バチカン公会議（1962-65年）である。カトリック以外の宗派の代表者もオブザーバーとして参加したこの公会議の論点は多岐にわたっており、公会議終了後に世界中で様々な議論が繰り広げられたが、68年5月との関係においてまず重要な争点となるのは、「現代化」や「今日化」と訳される「アジオルナメント」だろう。公会議の根本姿勢を示すと見なされたこの言葉は、現代世界と向き合いながらあらゆる面で教会の刷新を図るというカトリック教会の姿勢を示すものである。「教会は、つねに時のしるし〔signa temporum / signes des temps〕について吟味し、福音の光のもとにそれを解明する義務を課されている」⁵という公

⁵ 『現代世界憲章（*Gaudium et spes*）』4（『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監訳、カトリック中央協議会、2013年、602頁）。

会議で発表された『現代世界憲章』の一節は、「アジョルナメント」の精神を端的に表している。つまり、第二バチカン公会議以降、カトリック教会は信仰への脅威を理由に世俗世界の出来事から目を背け教会内部に閉じこもることはもはやできなくなり、現代世界とたえず対話をしながら自己刷新を行うという方向に進み始めたのである。

さらに、あらゆる制度への批判という68年5月の特徴を考えれば、『教会憲章』へとまとめられることとなる公会議における教会論も見逃すことはできない。そこで表明されたのは、「神の民」ないし「旅する神の民」として教会を捉えることだった。「神の民」という聖書的表現によって教会を改めて規定することは、教会が自らを自己完結した統一体としてではなく、現代世界のただ中であって救いへの道を歩む旅を続ける存在として確認することを意味している。ここでもまた世界へと開かれた教会のあり方が問われ、教会の制度的硬直性を問い直す視座が提示されているのである。

それでは、フランスにおいてはこのような革新的な成果を含む第二バチカン公会議はどのように受け止められたのだろうか⁶。教会の変化に対して多くの信徒は戸惑いを覚えたようであり、フイユが紹介しているある雑誌が行ったアンケートには、「これは信仰と教会の諸制度、とりわけ教皇の権威に対する最もひどく根本的な攻撃だ」という声が寄せられており、当時の混乱をよく示すものとなっている⁷。ほかにも公会議をめぐる混乱は教会内部に様々な分裂を生み出すこととなった。たとえば、公会議に参加しながらも「アジョルナメント」に反対し、『現代世界憲章』への署名を拒否したマルセル・ルフェーヴルを中心とする保守派の司教の一派は、公会議の成果を批判し続け、公会議が生んだこの分裂はルフェーヴルの破門（1988年）に至るまで長く尾を引くこととなる。またペルティエが指摘しているように、「アジョルナメント」の必要性を認める人々のあいだでも、公会議を「出発点」と見なし、現代世界との接点をさらに見出していこうとする人々と、公会議を「到

⁶ フランスにおいて第二バチカン公会議がどのように受け止められたかについては、次の研究を参照のこと。Étienne Fouilloux, « Le choc de Vatican II » in *Les chrétiens français entre guerre d'Algérie et mai 1968*, Parole et Silence, 2008, p. 275-287.

⁷ *Ibid.*, p. 284.

達点」と見なし、それ以上の現代世界への適合を拒否する人々のあいだの亀裂が深まっていた⁸。以上のように60年代のフランスのカトリック教会をめぐる状況は、現代世界の問題へと目を開き、自らの制度を問い直そうとする方向性と、それへの当惑や反発が混ざり合う状況のなかにあったといえる。そのようななかで68年5月は到来したのである。

「時のしるし」としての68年5月

それでは具体的に68年5月の渦中におけるキリスト教徒の動きを見ていきたい⁹。事の発端は5月3日だった。この日は、前日のナンテール校の閉鎖を受けて開かれたソルボンヌでの抗議集会に警官隊が導入されることで、500人以上の逮捕者が出ることとなり、カルチュラタンにおける最初の大規模な衝突が起きた日として知られている。この大量の逮捕者のなかに、パリのカトリックの学生によって構成されていたリシュリユー・センターの会長だったジャン・クレマンが含まれていた。彼は2カ月の懲役刑を課せられることとなったのだが、実のところクレマンは抗議集会に参加していたのではなく、翌日からのシャルトル巡礼のための歌集を探しに来て、たまたまそこに居合わせたただけであった。このような事態に対し、5月6日に「キリスト者の証言」という団体がいち早く声明を発表し、「警察の粗暴かつ常軌を逸した措置」¹⁰を非難し、学生への連帯を表明している。また同じ日の夜には、大学とグランゼコールのカトリック・アクション（Action catholique universitaire (ACU), Action catholique des Grandes Écoles (ACGE)）と「キリスト教学生青年団」（Jeunesse étudiante chrétienne (JEC)）が共同で声明を出し、大学で起きていることは「真の問題」を提起していると強調したうえで、「警察の恣意的な介入と学生に対する刑罰」を批判し、5月3日の事態が「たんなる暴力の爆発」ではないという見解を示している¹¹。このようにクレマンの逮捕に端を発したキリスト

⁸ Denis Pelletier, « Religion et politique autour de Mai 68 », *Socio*, n° 10, 2018, p. 90.

⁹ 68年5月におけるキリスト教徒の動向についての記述は、パリ大司教区の歴史アーカイヴ調査を踏まえた次の著作を主に参照した。Grégory Barrau, *Le Mai 68 des catholiques*, Les Éditions de l'Atelier/ Les Éditions Ouvrières, 1998.

¹⁰ *Ibid.*, p. 35.

¹¹ *Ibid.*, p. 36.

教徒の最初の動きは、学生への連帯を示すものであった。

しかし、このような素早い反応は、上記の一部のグループや学生団体に限られていた。聖職者に目を移せば、パリ大司教区のマルチ大司教が、日々目まぐるしく進行する出来事に対して態度表明を行ったのは、5月11日未明になってのことだった。大司教のメッセージは、以下のように、学生への連帯を示した上記の活動家たちの態度とはまったく異なっている。

私は冷静になるよう呼びかけます。暴力はただちに止められなければなりません。私は、どちらの陣営であれ、責任を有するすべての人が、改めて互いに出会うことを求めます。すぐさま正しい解決策に至る必要があるのです。私たち全員が無関係ではありません。¹²

一読してわかるように、大司教は、異議申し立てを行う学生や労働者の側にも、警察や権力の側にもつかない立場から、事態が鎮まる方向へ向かうよう呼びかけている。このような中立的な態度は、当時のフランスのカトリック教会の通例にしたがったものだった。教会は、信仰に照らした信徒の社会生活の方向性を示すだけで、政治的な判断はそれぞれの信徒に委ね、自らは中立の立場を堅持することを旨としていたのだが、バローが指摘するように、5月の出来事を前にしてのこのような中立の立場が露呈する「半沈黙状態は、パリの聖職者の混乱を如実に示し、彼らの言語は状況にそぐわない」¹³ものとなっていた。そのため、中立的態度を示す教会と、学生への連帯を表明した活動家の乖離は深まっていく。5月13日の大規模デモでは、「キリスト者は学生と連帯する」というプラカードを掲げる一団も登場するようになり、キリスト教を保守的の制度と見なす学生や労働者の側からの反発をともしないながらも、キリスト教徒の側からの学生への連帯が続々と表明されていくこととなった¹⁴。ここではそれらのうち、5月16日発行の『キリスト者の証言』に掲載されたフランソワ・ビオの論考に注目したい。

¹² *Ibid.*, p. 30.

¹³ *Ibid.*, p. 32.

¹⁴ *Ibid.*, p. 40-41.

5月5日の日曜日、800人のカトリックの学生はシャルトルにいた。周知のように、そのときナンテールとソルボンヌの仲間たちは闘っていたのだ。なんと象徴的なことか！ […] あらゆる若者が正義と自由のため一致した運動のもとに集っているときに、[…] もはやキリスト者は巡礼や情報収集や省察などしている場合ではないのだ。福音のほかならぬ真理はキリスト者の手中にあり、この真理はキリスト者の仲間たちと団結して働くのである […]。¹⁵

ここでビオは、ジャン・クレマンが偶然逮捕されるきっかけとなったシャルトルへの巡礼を批判し、キリスト教徒の学生に対して異議申し立ての運動に参加するよう強く促し、5月前半に声を上げたキリスト教徒たちと同様にナンテールやソルボンヌの学生たちとの連帯を表明している。しかし、ここで注目すべきは、このような連帯を正当化する論理である。ビオは、眼前で進行する出来事と福音のあいだにつながりを見出すことによって、学生への連帯は信仰による必然だと考えている。つまり、福音によって連帯が正当化されているのである。前節で見た第二バチカン公会議をめぐる議論を思い起こせば、このことは68年5月を「時のしるし」と見なし、福音に照らして説明することにほかならない。『現代世界憲章』の一節を引用すれば、「神の民は、世界を満たす主の霊によって自分が導かれていることを信じ、この信仰に基づいて、現代の人々と分かち合っている出来事、欲求、願望の中に、神の現存あるいは神の計画の真のしるしを見分けようと努める」¹⁶。ビオのようなキリスト教徒にとって、68年5月は第二バチカン公会議の「時のしるし」という考え方に沿って捉えられるべき、「現代の人々と分かち合っている出来事」だったのである。

教会という制度への異議申し立て

5月の日々の中で、学生への連帯の表明から、福音による連帯の正当化へと進んでいったキリスト教徒のあいだから、今度は教会それ自体を問直す動きが出てく

¹⁵ François Biot, « La foi se vit dans la rue », *Témoignage Chrétien*, 16 mai 1968, p. 12. この号は京都大学人文科学研究所のアーカイヴで参照することができる。http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~archives-mai68/Temoignagechretien.php（最終確認日：2018年12月31日）

¹⁶ 『現代世界憲章（*Gaudium et spes*）』11（前掲『第二バチカン公会議公文書』、610頁）。

ることとなる。先にも述べたように、68年5月があらゆる制度や権威を問いに付すことであったのだとすれば、学生や労働者の側から教会への批判が現れてくるのは当然のことと言えるだろう。けれども、ほかならぬキリスト教徒の側からも同様の批判が連続して噴出したのである。最初は、5月21日の日付を付された「キリスト者への呼びかけ (Appel aux chrétiens)」というカトリックとプロテスタント双方の14名の署名者による声明だった¹⁷。カトリックの側の署名者には、第二バチカン公会議の成果を具体化するためにカール・ラーナーやイヴ・コンガールらと雑誌『コンキリウム』を創刊したマリ＝ドミニク・シュニユヤ、前出の『キリスト者の証言』の編集長だったジョルジュ・モンタロンがおり、プロテスタントの側ではナンテール校の哲学教授であったポール・リクールが名を連ねている。声明は8項目から構成され、冒頭の項目で署名者たちの立場が次のように明確に示されている。

1. 署名したキリスト者——カトリックもいればプロテスタントもおり、信徒も司祭も牧師もいる——は、学生と労働者の行動に連帯を表明する。¹⁸

パリ大司教マルティがカルチェラタンで対峙するどちらの側にも与しないという中立の立場を表明していたのに対し、この呼びかけの署名者たちは、自分たちが学生と労働者の側に立つことを明確に表明している。そのうえで声明は、学生と労働者の異議申し立てを2項目にわたって分析した後、キリスト者へ向けて以下のように呼びかけている。

4. 署名者は、国家においても教会においてもさらなる正義と自由が君臨するために、これまで様々な形で闘ってきた。そして、現在の出来事のうちに、より人間的な社会が到来する大きなチャンスを見て取っている。
5. それゆえ署名者は、この国のキリスト者——信徒であれ司祭であれ牧師であれ——に対して、労働者と学生の運動に参加したり、それを支援したりして

¹⁷ この声明はパローの『カトリックの68年5月』にその全体が再録されている。Barrau, *Le Mai 68 des catholiques*, p. 133.

¹⁸ *Ibid.*

いるキリスト者たち——その数はすでに相当なものになっている——に加わるよう呼びかける。

6. けれども署名者は、キリスト者に対して次のことに注意してもらいたい。つまり、革命にキリスト者が存在することは、教会に革命が存在することを前提とし必要とするということである […]¹⁹

これら3項目には、国家と教会に共通する問題を地続きで捉えようとする姿勢が一貫して表れている。教会を世俗の国家から区別することによって、教会が自らの内部に閉じこもり、世俗の社会に目をつぶってしまうことへと容易に転じる可能性があるという認識は、カトリックに限って言えば、前述のようにまさに第二バチカン公会議によって問い直された事柄であった。カトリックとプロテスタント双方が加わったこの声明においても、「正義と自由」が国家と教会においてともに問われねばならないこととして掲げられ、5月の出来事のうちに、「正義と自由」がさらに押し進められる可能性が看取されている。さらに注目すべきは、「革命」までもが国家と教会に共通して存在しなければならないとされている点である。このように「革命」が捉えられることによって、キリスト教徒に対する学生や労働者の革命への参加の呼びかけは、同時にキリスト教徒に教会の革命を呼びかけるものとなる。それではここでの「教会」とは、そして「教会に革命が存在すること」とはいかなる事態を意味しているのだろうか。再びカトリックに限定して言えば、ここで問い直す必要があるとされているのは、聖職位階制に基づく制度としての教会だろう²⁰。

このようなキリスト教徒自身による教会制度の問い直しは、続いて5月24日の

¹⁹ *Ibid.*

²⁰ 「教会に革命が存在すること」という文句は、原文ではla présence de la révolution à l'Égliseだが、草案の時点ではla présence de la révolution dans l'Égliseであり、シュニュの意見によってこのように修正されたことをパローの調査が明らかにしている (*Ibid.*, p. 49)。フランス語ではdansもàも場所を示す前置詞であるが、dansが具体的なかつ個別的な空間的広がりをもった場所の内部を示すのに対し、àは抽象的な場所を意味するというニュアンスの違いがある。つまりdansをàに書き換えることによって、声明が目論んでいるのが、個々の教会に対して異議申し立ての運動を波及させるのではなく、教会一般という制度の問い直しであることが示唆されている。

「100人の司祭は宣言する (100 prêtres déclarent)」という声明文でも主張されることとなる²¹。これはパリとその周辺地域の司祭によって発せられたものであり、冒頭では第二バチカン公会議とのつながりが明示的に表明されている。

人々と日々の関心事を共有し、生活と福音のあいだに見出されたすべてのつながりを人々のなかで表現したいと思っている司祭の数はとても多い。このようなことは第二バチカン公会議以前から存在してはいたのだが、公会議以来、このような探究は一段と強調されることとなったのだ。現在の出来事は、署名した司祭に〔…〕、自らの省察の本質を公に表明するよう促している。²²

公会議が示した「時のしるし」を読むことや「神の民」という考え方が、いかに68年5月の出来事と共鳴するものであったかをここからも読み取ることができるだろう。そしてこの司祭たちもまた、教会批判を不可避のものとして結論づけることとなる。

問い直されているのは、政治、経済、大学にまつわるあらゆる家父長主義的かつ権威主義的な考え方である。教会もこの批判を免れえないということを私たちは知っている。²³

家父長主義や権威主義に対する批判が教会へと向けられるとき、教会の位階制度が念頭に置かれていることは明らかである。このように5月の後半になると、キリスト教徒自身による教会制度への批判が続々と現れるようになり、最終的にこの流れは68年の秋に始まる「交流と対話 (Échanges et Dialogue)」の運動へとつながっていく²⁴。司祭の政治参加や賃金労働を可能にすること、教会における民主的手続きの実現、聖

²¹ この声明もバローの著作に全文が掲載されている。 *Ibid.*, p. 134.

²² *Ibid.*

²³ *Ibid.*

²⁴ 「交流と対話」については、バローの著作の第5章「ある運動の生成——交流と対話」 (*Ibid.*, p. 109-122) と、ペルティエの『カトリックの危機』の以下の箇所を参照。Denis Pelletier, *La crise catholique. Religion, société, politique en France (1965-1978)*, Payot & Rivages, 2005 [2002], p. 144-155.

職者の独身制度の廃止を要求する「交流と対話」運動は、68年5月の出来事の中で生じた教会批判が具体的な形として結実したものであり、まさに「68年5月の継承者」²⁵にほかならない。司祭の解放を目指すこの運動は世界的な広がりをもつようになり、スペイン、オランダ、ベルギー、イタリアなどのヨーロッパ諸国だけでなく、ラテンアメリカにも及ぶ国際的なネットワークを構築するに至る。かくして、68年5月から生まれた教会制度の問い直し、とりわけ聖職者のあり方をラディカルに問い直す動きは、フランスを越えた影響力をもつことになった。68年5月との関係の中からキリスト教に一つの大きな問いが投げかけられることとなったのである。

おわりに——「時のしるし」と終末

最後に再び68年5月の日々の中に視線を戻そう。68年5月を発端とする教会批判の動向が以上のようなものであるとしても、実際にはこのような教会制度の問い直しに参加したキリスト教徒はどれほどいたのだろうか。これまでのところでは、学生や労働者の側に連帯したキリスト教徒の動きに注目して声明文などを読み解いてきたが、最後にこうした流れとは異なる立場を表明したビラを見てみたい。それは京都大学人文科学研究所の68年5月のアーカイヴで公開されている西川長夫、西川祐子夫妻が収集した一枚であり、ビラ自体に日付はないが夫妻の手によって5月29日の日付が付されたものである²⁶。発行主体はパリの大学都市のカトリック団体の責任者たちであり、「現在の運動に直面して、自らの立場を明確にする」ためのものだとされ、そこでは彼らが戦っている三つのものが列挙されると同時に、五つの提案がなされている。前者の三つのものとして挙げられているのは、「分断」、「暴力」、「恐怖」であり、提案されている五つの事柄とは、「明晰な省察」、「自己自身の問い直し」、「対話」、「真の責任の引き受け」、「福音にたえず直面すること」である。しかし、これらの項目すべてを通じて、異議申し立てをしている学生や労働者への連帯の言葉は一度も発されておらず、これまで見てきた声明が学生と労働者へ

²⁵ *Ibid.*, p. 146.

²⁶ <http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~archives-mai68/tracts.php>（最終確認日：2018年12月31日）

le 29 mai

" LES HOMMES RESTENT LIBRES . ILS SONT RESPONSABLES DE L'AVENIR "

François MARTY
Archêvêque de Paris

Face au mouvement actuel les responsables de la Communauté Catholique de la Cité Universitaire tiennent à préciser leur position :

NOUS RECHERCHONS UNE SOCIÉTÉ NOUVELLE FAITE POUR L'HOMME

Non pas pour un "type d'homme" qui resterait à définir
(donc à limiter)

Mais pour l'Homme concret dont il faut achever la construction
et dont JESUS-CHRIST est le modèle .

NOUS COMBATTONS :

LA DIVISION, due plus à l'affrontement d'idéologies extrémistes
qu'aux désaccords sur l'action à mener .

LA VIOLENCE , comme seul recours admis ; elle entraîne la HAINE,
et nous fait entrer dans un cycle infernal . Les ch
chrétiens ne sauraient se soumettre à la "Totalité"
ou au "sens de l'Histoire"

LA PEUR , qui est l'opposé de la LIBERTÉ D'ACTION

NOUS PROPOSONS :

LA REFLEXION LUCIDE , qui fait place au silence intérieur

LA REMISE EN QUESTION de soi-même, de ses attitudes personnelles
et pas seulement de celles des autres .

LE DIALOGUE avec tous ; pas seulement avec ceux qui pensent com-
me nous .

L'ACCEPTATION DE RESPONSABILITÉS VRAIES fussent-elles onéreuses

LA CONFRONTATION PERMANENTE A L'EVAINGILE

UTOPIE ? NON ! Car nous constatons :

- une soif de plus grande Justice
- un dynamisme des jeunes qu'on disait amorphes
- une effervescence intellectuelle qui est créatrice
- une amélioration du niveau de conscience politique des étudiants
- un refus d'une Société sans âme

NOUS INVITONS TOUS LES CHRÉTIENS ET TOUS LES RESIDENTS
DE BONNE VOLONTE A REVALORISER LEUR POSITION PERSONNELLE
ET COLLECTIVE PAR RAPPORT AUX ÉVÈNEMENTS ACTUELS .

の連帯を明確に表明していたのに対して、著しい対照をなしている。ビラの執筆者たちのこのような立場を端的に示しているのが、末尾の次のような一文である。

私たちはすべてのキリスト者と善良な意志をもつ居住者に対して、現在の出来事に対する個人的な立場と共同体的立場を見直すよう勧めます。

この一文が示しているのは、マルチ大司教が示したような対立するどちらの側にも与しないという姿勢と同じ態度である。事実、このビラは「人間は自由なままだ。人間は未来に責任をもっている」という大司教の言葉をエピグラフに掲げている。大司教やこのビラが示しているような態度は、目まぐるしく進展する5月の出来事を前にした当惑を端的に示しており、学生や労働者への連帯を呼びかけた者たちがいた一方で、このような混乱や戸惑いを覚えたキリスト教徒もまた多くいたであろうことは想像に難くない。しかし、このような当惑のうちにあった人々もまた、眼前で展開される出来事に呼びかけられ、態度決定を迫られていたことに変わりはない。

それでは68年5月を「時のしるし」としたキリスト教徒と彼らとの違いは、どこに求められるだろうか。それは、68年5月の出来事に終末のしるしを見て取ったか否かにある。周知のように、「時のしるし」という言葉は「マタイによる福音書」に由来し、終末を告げるしるしを意味している。それゆえ第二バチカン公会議で示された「時のしるし」という考え方は、カトリック教会が歴史の中で生起する出来事に応答する必要性を確認すると同時に、終末を未来へと繰り延べるのではなく、現在において自己を刷新するものとして理解することをも含意している。そうであればこそ、68年5月の出来事を「時のしるし」として読み取ったキリスト教徒たちは、歴史的状況のただ中で教会に要求されていることを探究し、教会を含む自己刷新を追求していくこととなったのだった。このようなキリスト教徒は、68年5月の異議申し立てに加わった者たちのメインストリームには決して登場することはないだろう。しかし、5月の出来事の周縁には、「時のしるし」を見分けた者たち、「あなたがたは空模様を見分けることを知りながら、時のしるしを見分けることができないのか」というイエスの言葉を生きた人々がまちがいなく存在していたのである。

参考文献

- BARRAU Grégory, *Le Mai 68 des catholiques*, Les Éditions de l'Atelier/ Les Éditions Ouvrières, 1998.
- BIOT François, « La foi se vit dans la rue », *Témoignage Chrétien*, 16 mai 1968, p. 12.
- CHIRON Yves, *L'Église dans la tourmente de 1968*, Artège, 2018.
- DAVEZIES Robert, *Mai 68. La rue dans l'Église*, Éditions de l'Épi, 1968.
- FOUILLOUX Étienne, *Les chrétiens français entre guerre d'Algérie et mai 1968*, Parole et Silence, 2008.
- JOFFRIN Laurent, *Mai 68 : Une histoire du mouvement*, Seuil, « Points », 2008. ローラン・ジョフラン『68年5月』コリン・コバヤシ訳、インスクリプト、2015年。
- JULIA Dominique, « Mai 68 : Un événement spirituel », *Études*, n° 4249, mai 2018, p. 73-82.
- PELLETIER Denis, *La crise catholique. Religion, société, politique en France (1965-1978)*, Payot & Rivages, 2005 [2002].
- PELLETIER Denis, « 1905-2005. Un siècle d'engagements catholiques », in DURIEZ Bruno, FOUILLOUX Étienne, PELLETIER Denis et VIET-DEPAULE Nathalie (dir.), *Les catholiques dans la République : 1905-2005*, Les Éditions de l'Atelier/ Les Éditions Ouvrières, 2005, p. 19-50.
- PELLETIER Denis, « Catholiques français de gauche et d'extrême-gauche à l'épreuve du « moment 68 » », in *Mai 68 raconté par des catholiques*, TempsPrésent, 2017, p. 11-34.
- PELLETIER Denis, « Religion et politique autour de Mai 68 », *Socio*, n° 10, 2018, p. 87-100.
- RAISON DU CLEUZIYOU Yann, « À la fois prêts et surpris : les chrétiens en Mai 68 », in PELLETIER Denis et SCHLEGEL Jean-Louis (dir.), *À la gauche du Christ : Les chrétiens de gauche en France de 1945 à nos jours*, Seuil, « Points », 2012, p. 357-387.
- SCHLEGEL Jean-Louis, « Changer l'Église en changeant la politique », in PELLETIER Denis et SCHLEGEL Jean-Louis (dir.), *À la gauche du Christ : Les chrétiens de gauche en France de 1945 à nos jours*, Seuil, « Points », 2012, p. 313-355.
- SERROU Robert, *Dieu n'est pas conservateur*, Robert Laffont, 1968.
- 西川長夫『[決定版] パリ五月革命私論』、平凡社ライブラリー、2018年。
「五月革命とカトリック者」、『世紀』第219号、1968年、60-62頁。
『第二バチカン公会議公文書 改訂公式訳』第2バチカン公会議文書公式訳改訂特別委員会監

訳、カトリック中央協議会、2013年。

「Archives.Mai 68」、京都大学人文科学研究所 共同研究班「ヨーロッパ現代思想と政治」：
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~archives-mai68/index.php>

付記

本研究は日本学術振興会科学研究費（特別研究員奨励費18J12326）の助成を受けたものである。